

のべ おか 市史だより

Vol.6

2025.3.17
TAKE FREE



▲ 松井商店資料(一部) 松井商店寄贈

写真は、旧延岡市街地の北端の祇園町にある松井商店資料の一部です。

松井商店資料は、戦中・戦後の町内会資料と戦後に通信販売が行われた書籍、総計二〇点に及ぶ資料群となっています。

このうち、戦中・戦後の町内会資料は、戦中に「東亜通商」と呼ばれた地区(現在の祇園町の北端、山下町の南端、恵比須町の一帯、戦後に現在の町名に戻る)が作成し、町内で回覧したものです。

旧延岡市の中心市街地が、昭和二十年(一九四五)六月二十九日の延岡空襲によって焼失したこともあり、戦中・戦後の町内会の様子を知ることができる数少ない歴史資料になります。

主に、回覧板として防空演習の案内や町内の各家庭に納税を促すための書類、配給といった町内の行事を知らせる文書が含まれており、その他にも国債の購入の割り当てに関する表、防空壕の配置状況を町内の各組の班長が記録した図面や金属回収に関する伝票、富高飛行場への勤労働員の報酬に関する書類等が含まれています。

中には、「防空法中改正法律案」や「隣組員転出入控簿」といった、今の役所で取り扱うような行政文書も含まれており、町内会が行政組織の末端に位置づけられていたことを示すものであるとともに、戦中の旧延岡中心市街地の市民の生活をうかがい知ることができる貴重な資料群であると言えます。

【参考文献】延岡市史(延岡市、昭和三十八年)

図師兼式は明治十年（一八七七）八月、延岡藩士・図師彦定の五男として、北浦村大字市振（現・北浦町市振）に生まれました。はじめは、「丑仲（うしなか）」と名乗っています。兼式は、明治二十八年、私立の旧制中学校である亮天社^③を卒業し、同三十三年日本法律学校（日本大学の前身）を卒業しました。

同三十七年には、高等文官任用試験に合格し、同三十八年より官僚として関東州民政署^④に勤務しました。翌三十九年四月には農商務省^⑤管下の熊本大林区署^⑥に転属し、林務官としてキャリアを重ね、在職中の同四十一年には、「兼式」と改名しました^⑦。その後、広島、高知、青森等各地の大林区署に勤務しました。

大正九年（一九二〇）四月、兼式は東京大林区署林務課長を依願退職し、キャリアを終えています。その後兼式は、東西臼杵郡を地盤に大正九年、十三年の二度、衆議院選に挑みましたが、力及ばずという結果でした^⑧。

引退生活から市長・村長へ八四冊に及ぶ一連の日記

今回寄贈された資料の中でも目を引くのは、大正十四年から昭和二十六年にわたって兼式自身が号数を付した八四冊に及ぶ一連の日記帳です。

大正十四年に北浦村大字三川内（現・北浦町三川内）の地に居宅を構えられた。兼式の日記は、三川内での日々生活に必要な物品の買い物や金銭の出入、手

- ③ 亮天社は、明治六年（一八七三）に中等学校として発足、藩士による寄付金や内藤家からの出資によって運営された。明治三十二年の県立延岡中学の創設に伴い、廃校した。（富永壽夫編『延岡亮天社の概況と周辺』昭和六十一年、夕刊ポケット新聞社）
- ④ 関東州は、明治三十八年、日露戦争の講和条約に伴い、ロシアから日本が継承した租借地で、現在の中華人民共和国遼寧省大連市の一部、遼東半島の最南端にあたる。民政署は、居住・活動する日本人、中国人、外国人に対する各種行政を行った機関である。（『国史大辞典』「関東州」の項、「テーマ別歴史資料検索ナビ アジ歴グロッサリ」<https://www.jacar.go.jp/glossary/>）
- ⑤ 明治十四年に成立した明治・大正時代の農林・商工行政の中央官庁。大正十四年（一九二五）に商工省と農林省に分割されたこととなった。現在の農林水産省と経済産業省の前身にあたる。（『国史大辞典』「農商務省」の項）
- ⑥ 明治十九年に、大小林区署制度が制定され、二十一大小林区署、その下に百二十七の小林区署、六十七の派出所が整備され、国有林の管理と経営組織の整備が始まった。大林区署は長期施策案の編成、小林区の監督等を行った。現在の森林管理局、森林管理署にあたる。（林野庁ホームページ/明治期の国有林事業について <https://www.rinya.maff.go.jp/j/kouhou/archives/ring-ya/kokuyurin.html>）

紙や電報のやり取り、植木や釣りなどの趣味に関することなどを書き留めたものでした。

しかし、昭和三年（一九二八）五月十三日、官営八幡製鉄所^⑨長官・中井勲作^⑩の一本の電報が兼式の人生を大きく変えることとなります。この日の電報は、中井が兼式へ延岡町内での面会を持ち掛けたものになります。

当時は、兼式の体調が優れなかったこともあり、中井との面談がすぐには実現しませんでした。その後電報による交渉が約一ヶ月間つづき、六月十日に兼式が八幡市に出向き、翌日、中井と面会を果たしました。

六月二十一日、兼式は福岡県八幡市長に就任し、昭和十七年四月までその任に当たりました。



▲ 図師兼式日記
大正十四年から昭和二十六年の八十四冊にも及ぶ一連の日記。



▲ 衆議院議員徽章、衆議院手帳
市長退任直後の昭和十七年から昭和二十年末まで衆議院議員を務めた。

- ⑦ 官報明治四十一年八月七日付
- ⑧ 八幡市史編纂委員会『八幡市史続編』八幡市役所、昭和二十六年
- ⑨ 八幡製鉄所は、日本の鉄鋼業をリードした最初の本格的な官営の近代的統鉄鋼一貫製鉄所。明治三十四年創業。昭和九年（一九三四）民間鉄鋼企業と合同して日本製鉄株式会社のもとに入る。（『国史大辞典』「八幡製鉄所」の項）
- ⑩ 中井勲作（一八七九～一九六八）熊本県生、明治三十八年農商務省入省、大正十三年より官営八幡製鉄所長官、昭和三年より日本製鉄株式会社初代社長兼会長を務めた。（『鉄と鋼』五四巻四号、昭和四十三年）

中井が八幡市長の選考に関わったのには、八幡市会（現在の市議会にあたる）が市長の選考を中井に一任したという理由がありました。中井は兼式の農商務省勤務時代の先輩にあたり、兼式を推薦するにあたって「廿年来の既知」^⑪として信頼を寄せていたようです。

当時の福岡県八幡市は、官営八幡製鉄所やその周辺に財閥系の製鉄所が進出する国内有数の工業都市でした。市内には製鉄所の工員が流入し、市政が施行された大正六年（一九一七）の約八万四千人から昭和十二年（一九三七）には約二十二万二千人に増加しました。大正九年には大規模な労働争議が発生したこともありました。^⑫

この他にも、前市長と市会、市会内の政党間の対立といった政治問題や人口増化による水道施設や工員の子女が通う学校の教室などのインフラ設備の不足といった問題が山積していました。^⑬

しかしながら、兼式は任期満了の度に市会から退任を慰留され、在任期間は歴代の八幡市長の中でも最長の四期十四年間に及んでいます。

兼式の在任期の出来事としては、昭和五年に昭和恐慌で緊縮財政下にも関わらず政府から市への交付金を三十万円から五十万円^⑭に増額が決まり、同九年には、八幡製鉄所から技術・財政での支援を受けて、貯水設備の拡張工事に着手したことが上げられます。^⑮

これらの事業に取り組みまでの八幡市役所内の動きや政府、製鉄所側との交渉の過程等について図師兼式資料、特に、図師兼式日記から詳細に説明されることが期待されます。

⑪ 図師兼式資料「小天地昭和三年自一月至六月」には、兼式の市長就任前後の新聞の記事がスクラップされている。兼式を市長に推薦するにあたり、中井と旧知の仲であったことが報道されていた。

⑫ 北九州市史編さん委員会編『北九州市史 産業経済』北九州市、平成四年

⑬ 北九州市史編さん委員会編『北九州市史 近代・現代行政社会』北九州市、昭和六十二年／同上『北九州市史（教育・文化）』同上、昭和六十一年

⑭ 当時の給与等をもとに比較すると現在の価値は二千から二千五百倍程の価値に相当する。（週刊朝日編『値段史年表 明治大正昭和』朝日新聞社、昭和六十三年）

市長退任直後には、福岡二区より衆議院議員選挙に出馬し当選。昭和二十年末の解散まで在職しました。

翌昭和二十二年二月二十五日から十一月八日まで北浦村長を務めており^⑯、この時は改正町村制や地方自治法の改正前にあたり、村会が選出した官選の村長として村政にあたりました。

同二十三年三月十六日には、大政翼賛会の関係者として、公職追放の指定を受けましたが、同二十六年六月二十六日には、指定が取り消されました。

その後、昭和二十七年十二月から翌二十八年九月にかけて二度目の北浦村長を務めています^⑰。この時は、地方自治法が施行されており、村長選挙に当選して村政を担いました。

その後、昭和二十九年十月十五日、七十八歳で亡くなりました。



▲ 北浦町三川内にあった図師兼式の自宅
（令和6年4月22日の調査の様子）
延岡市教育委員会、九州医療科学大学の山内利秋准教授、
ひむかへりテージ機構が家屋の調査を行った。



▲ 宮崎県村長徽章

⑮ 「製鉄所五十年と八幡市（八幡市特別寄稿）」『八幡製鉄所五十年市』八幡製鉄所株式会社八幡製鉄所、昭和二十五年

⑯ 『北浦町史』北浦町、平成十四年

⑰ 前掲注16

八幡市長に就任する直前の兼式の日記の内容には、自宅の横を流れる小川の支流でハヤを釣ったり、読書をしたり、晩酌を楽しんだり、悠々自適な生活を送っていた様子を見ることが出来ます。

現在使われている住所では、北浦町三川内と番地を書けばよいのですが、日記を読み進めると、三川内の中にある集落や地名を読み取ることが出来ます。

特に、兼式が滋養をつけるために「佛ノ越」というところで鶏卵を買い求めていることが度々記されています。

また、昭和三年五月十日、兼式は仏の越にある観音堂の新築に際して開眼供養に参加している記事がみられます。

筆者は、兼式の親せきにあたる日高さんに案内をいただき現地調査をすることができました。

三川内小中学校の附近の国道三八八号線から南側の山道に入ったところにある、梅木地区と歌糸地区を結ぶ旧道を訪ねました。峠道の上には祠堂があり、中には聖観音像や不動明王の石仏が安置されていました。



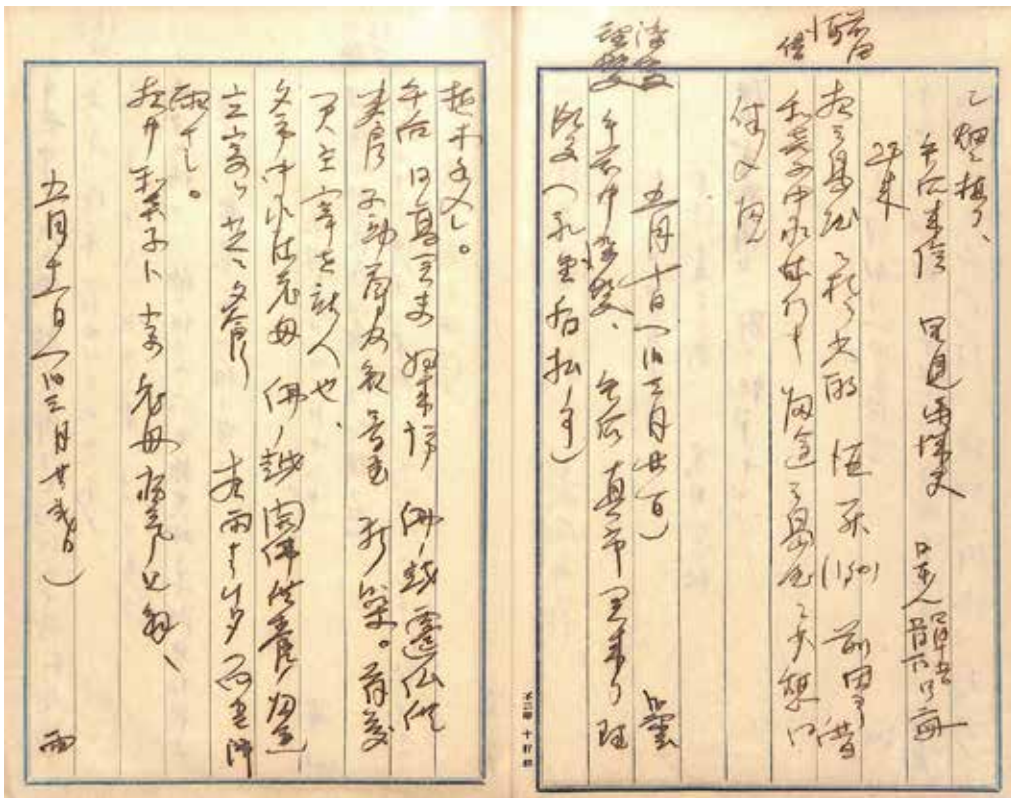
▲ 仏の越の旧道 ▼ 仏の越周辺の地図
梅木地区と歌糸地区を結ぶ旧道。峠には祠堂が今も残され、聖観音や不動明王等の石仏が安置されている。



更に、お話しをうかがったところ、仏の越にある旧三川内中学校の駐車場の敷地だった所には商店があり、生活用品を買い求めていたといいます。

このように、三川内での生活を意識しながら日記を読み解いていくと、兼式が生きていた時代の生活や風景を知れるきっかけになると同時に、兼式が三川内の風景や生活を愛し、慈しみながら暮らしていたことが想像されます。

以上のことから、延岡市、特に北浦町の近現代史や当時の生活の様子を読み解くことで民俗学の素材として活用されることも期待されます。



▲ 図師兼式日記 昭和三年(一九二八)五月十一日条
兼式は午前中に理髪を済ませ、仏の越の不動尊及観音堂の新築供養に参列した。日中に植木の手入れをし、水やりを終えたことから、夜の雨を心配している様子がうかがえる。



寄贈者からの言葉

図師 兼嗣様

祖父・図師兼式の遺品をお受け取りいただきまして、誠にありがとうございました。

この度のことは、筑紫女学園大学の時里奉明教授が、昭和初期の北九州市の歴史を研究される過程で祖父の存在を知り、延岡市の文化財・市史編さん課の方に照会されたのがはじまりでした。宮崎市内に住む親戚に連絡がとられ、たまたましばらくぶりに会った際、このような話が持ち上がっていると聞いて、現在に至りました。細い道筋でしたが、祖父が亡くなって今年で七十年を迎え、何かに導かれたように感じます。

祖父は西南戦争のさなかに生まれ、第二次大戦の終戦後まで、正に激動の時代を生きています。残した日記は二十年以上にわたる比較的詳細なものですし、高等文官試験の合格証書や多数の辞令などは、なにかの参考になるかもしれません。書籍は亡父が、扁額や調度品は祖母や母が大切に守ってきました。市内に住む従姉妹などにも助けられました。延岡市によって次世代に残していただけることは望外の喜びです。

私自身は、祖父は公職追放を受け、失意の日々を北浦で過ごしていたと思っていました。

しかしながら今回の調査の中で、必ずしもそうではなく、祖父が敬愛した平野五岳の詩のように故郷で穏やかに暮らしていたのだろうと考えるようになりました。

恐らく延岡市の多くの皆さんにとっては馴染みの薄い存在かと思われると思います。これを機に祖父のことを知っていただければ大変うれしく思います。

最後になりますが、遺品の調査、整理、保存などに多大なご尽力いただきました延岡市教育委員会文化財・市史編さん課の皆さまに厚く御礼申し上げます。



写真中央が図師様

カルチャーゾーンフェスタで市民参加型の広報活動

令和六年十一月三日(日) 図師兼式資料の展示、調査報告会と「古文書ワークショップ」を開催しました。

カルチャープラザフリースペースでは、図師兼式資料の展示し、筆筭や革製靴、シルクハットの他、家の棟札等を出品し、多数の来場者がありました。

社会教育センター研修室五で一〇時より調査報告会を実施しました。文化財・市史編さん課の沖屋雄大 主任主事(学芸員)が「図師兼式資料の調査と概要」と題し、資料調査の概要と兼式の略歴や日記について紹介し、約十五名の参加がありました。

十二時からの古文書ワークショップでは、九州医療科学大学の山内利秋准教授を講師に、約一〇名の参加者と屏風の中の裏貼りから古文書を取り出す実習形式で行いました。

屏風の中からは、近代の魚介類の取引帳簿が出てきました。筆や万年筆でページにびっしりと「サバ」「アジ」といった様々な魚の名前が書き込まれていました。

ここで取り出された資料については、ワークショップ内でラベリングを行っており、後日整理を行う予定です。



▲ 展示の様子



▲ ワークショップの様子

部会通信

中世部会



▲ 現地調査風景(高野山清浄真院)

十月に高野山清浄真院(和歌山県)で中世から近世初期の過去帳(家々の先祖の名前や戒名を記した帳面)や月牌帳(毎月のお祭りに先祖の供養をしてもらったための帳面)を調査しました。中世の日向国内の有力者に関するものは今回確認できませんでしたが、有馬氏時代の延岡藩士の記録を少数ですが確認しました。

古代部会



▲ 柴田部会長による講演会の様子

昨年度に引き続き豊後(現在の大大分県の南部)・日向国境の延岡地域の古代官道ルートの検証作業を進めています。四月に近世部会と合同で梓山争論関係資料の資料調査と所有者への聞き取り調査を実施し、それをふまえて、十二月から一月にかけて現地での調査を行いました。二月には、柴田部会長が「古代日向国の成立過程」と題した講演を行い、多くの方が来場されました。

考古部会



▲ 現地調査風景(西階城跡)

五月より大貫貝塚の出土遺物の調査を行い、九月末から十月初めにかけて貝類・魚類・獣骨の分析と検討を行いました。二月の末からは同貝塚周辺のボーリングによる地質調査を行っています。また、九月の部会では、延岡市内の城跡の現地調査を行いました。十月中旬には、県指定二一号墳(稲葉崎町菅原神社)の測量調査を行いました。

民俗部会



▲ 現地調査風景(三川内 菅原神社)

十一月の末から十二月にかけて、三川内神楽のうち、歌系神楽の調査を行いました。深夜に及ぶ調査になりましたが、神楽の演目や後継者が着実に育っている現状、神社のまわりの祠や木に添えられた供物など大変興味深いものに触れる機会となりました。今後、市内の神楽や民俗芸能、習俗、口伝伝承などの調査を続けていきます。

近現代部会



▲ 令和6年度第1回目近現代部会

八月には明治大学博物館(東京都)において内藤家文書のうち、延岡県や明治以降の内藤家の生活や事業を補佐した家令局や西南戦争に関連する資料調査を行いました。十一月には野口研究所(東京都)において旭化成や創業者の野口遵に関する資料の調査・撮影を行いました。引き続き、各委員による調査を進めています。

近世部会



▲ 現地調査風景(笠間稲荷神社)

史・資料編近世一、二の刊行に向けた準備を進めています。四月には、高千穂コミュニティセンターの正念寺文書や佐伯市歴史資料での佐伯藩政資料のうち延岡藩の国替えに関する記事、八月には、肥前島原松平文庫及び南島原市有馬支庁(長崎県)で島原・天草一揆、十二月には笠間稲荷神社(茨城県)で延岡在城時代の牧野氏に関する資料調査を行いました。今後も県内外の大名家関係資料や市内の地方文書の調査を進めていきます。

延岡に
ゆかりのある

資料や情報を探しています。

～あなたの家の押入れや蔵、区や公民館の倉庫などに、こんなものはありませんか？～

このようなものが延岡の歴史を知る「資料」となります。



古文書



古写真・アルバム・絵葉書

個人的な家族写真などからでも、当時の服装や街並み、生活様式などを知ることができます。



記念誌

地域や学校などで手作りしたもので構いません。



日記(日誌)や手紙



ビデオやカセットテープ

地域のお祭りや唄、行事などを記録したものを。



昔の道具

お話を聞かせていただくだけでもかまいません
(昔の道具については収蔵スペースの関係で受け取れない場合があります)

情報や資料をお持ちの方は、お気軽にご相談ください!

【相談先】文化財・市史編さん課 市史編さん係 (☎0982-22-7047)

おしえて!
「市史編さん」って
なに?

Q どんな「しりょう」を
あつめているの?

Q 市史では、どんな「しりょう」を
調べているの?

A 6つの分野で調べる「しりょう」が異なるんだ。
遺跡から発掘されたものや古文書などの
古い時代のものだけではなく、数十年前まで
使っていた道具や写真、日記なども
延岡市の歴史に関係するたいせつな
「しりょう」になるんだよ。

Q 古い道具や写真を見つけたとき、
「しりょう」になるか
どうかはどうやって見分ければいいのか?

A おじいちゃん、おばあちゃん、おとうさんや
おかあさんに道具や写真などについて
思い出を聞いてみよう。今は大きく違う
延岡の情報を見つけたら、市史に関係する
「しりょう」になるかもしれないよ。
市史編さん係に教えてみよう。



編集後記

市史だより六号をお届けします。
本年度は当初から大変濃厚な調査や資料整理が続きました。図師家資料の寄贈受け入れをはじめ、佐伯市歴史資料館、高野山清浄真院、笠間稲荷神社での資料調査、市振神社や三川内の菅原神社での神楽の現地調査を行いました。

御協力いただいた皆さまには、厚く御礼を申し上げます。

今回紹介した図師兼式資料の中でも「図師兼式日記」は、筆者自身も大変印象深い資料となりました。資料の整理をしていた当初は、筆者自身も「日記が多いな」という印象がありました。が、整理を続ける中で、一冊ずつ年月日が判明していき、その膨大な冊数に「とんでもない史料とめぐり会ってしまった」と驚きを隠せません。

普段、翻刻された日記や古文書を使って講話の資料を作成することがありますし、世の中に知れ渡ったことを歴史資料から自分自身で再検証するということには挑戦しています。が、世に出たことのない日記にめぐり会い、まして翻刻すらされていないその中身をみることでできるというのは、歴史学の末席に身を置く者として、またとない僥倖と言えるでしょう。

(市史編さん係員〇)